

アイルランドの社会環境について

後 藤 信*

A Study of Social Environment of Ireland

Makoto Gotoh*

Ireland is an island situated off the Eurasian Continent and bears a geographical resemblance to the situation of Japan which is also an island country and lies off the opposite side of the same Continent.

Although the natural surroundings of Ireland are somewhat similar to those of Japan, the political history of Ireland is quite different from that of Japan. Ireland has been ruled and colonized under the British imperial and colonizing force since the conquest of Henry II, who took advantage of the internal conflicts of the island and invaded Ireland in 1171 to be the overlord of the entire island.

From that time through the Reformation up to the 'troubles' of Northern Ireland in the latter half of 20th century, the Irish have tried to recover their lost land and to regain old independence over and over again by means of bringing Continent powers in to support their uprising against British sovereign, a guerrilla war to protest the colonized regime, a newly-invented boycott method for resistance, hunger strikes, the political murals on house wall, marching on the streets to demonstrate against the British establishment or by any possible means to be thought of, all of which, do not necessarily bring any political fruits to the native Celtic people living in the Catholic community. In my short scientific account, I'll make an effort to analyse the social circumstance of Ireland historically and to find a better way of how to express the discriminated minority's wish of achieving the political solution.

Key Words (キーワード)

Partition (アイルランドの分割), Minority (少数民族), Gerrymander (ゲリマンダー), Terrorism (テロ), A Protestant state for a Protestant people (プロテスタント独裁国家)

[I] アイルランド共和国と北アイルランド

アイルランドを表すのに英語でいう Ireland の下線部分の語源は古アイルランド語 Old Irish の Erinne である。それが Eriu そして iriu と変化したものである。意味は '肥沃な' fat, fer-

tile である。それにゲルマン系の語 -land が加わって Ireland という語が出来上がったものさされている。その他, Hibernia, Hibernian という言葉もある。それはラテン語の hibernus に由来しローマ人がアイルランドを呼ぶ時に使っていた。つまり, wintry, 「冬の国」の意味である。アイ

*呉大学社会情報学部 (Faculty of Social Information Science, Kure University)

ルランドは北緯50°を越えたところに位置しながらメキシコ湾流の影響もあって冬暖かく、牧草など四季を通じて緑を保っている。Ireland は別名、緑の島、エメラルドの島 the Emerald Island とも呼ばれている。かく言葉の上でも色々表情をもつアイルランドは紀元前12,000~10,000年頃の氷河期にはアイルランドはヨーロッパ大陸と地続きであったと想定されている。紀元前8,000年頃には島の東海岸に人が住み始め狩猟や漁労によって生活をしていた。紀元前4,000年頃には農耕が始まり、紀元前2,500年頃には青銅器文明期を迎える。そして、紀元600~400年頃には中央ヨーロッパからスペイン、ブルターニュを経てアイルランドに住み着いた鉄器文明を携えたケルト人が到来する。現代のアイルランド人の祖とされている彼等ケルト人は紀元前150年頃アイルランドの島全域を支配して先住民族を吸収したものと考えられている。キリスト教の伝播は五世紀のパトリック聖人に負うところが多い。今日、St. Patrick Festival は3月17日ニューヨークを始めとして世界の至る所で緑色の衣服を纏ったアイルランドからの移民の末裔達によって春を告げる祭りとして祝われている。

日本人にとってアイルランドと言えば、明治時代より世界名歌唱集の一つとして輸入されている名曲 The Last Rose of Summer 日本語訳名「庭の千草」-from Thomas Moor's Irish Melodies、や Londonderry Air 別名 Danny Boy として知る人の多いこれらの曲の故郷としてその地名、国名は親しまれている。文学の世界では、「ガリバー旅行記」の作品の作者である Jonathan Swift の名は、世界中の人達に、幼年時に親しんだ絵本から、又、学生時代に対面した世界文学全集の中の一冊から良く知られている。舞台や映画を通して誰もが知るミュージカル My Fair Lady の原作者で、ノーベル賞受賞の劇作家、George Bernard Shaw など世界的な作家群を輩出しているのがアイルランドである。然し、いずれも作品が英語で書かれているため、彼等の文学上の業績がともすれば英文学の区分に収められて

いて、アイルランド出身の作家である事実が、ともすれば見落とされ勝ちである。歴史的に見た時、アイルランド島の場合、ヨーロッパの諸民族から、そして中世以降は特に隣の島の英国による侵略、入植、そして併合が続いている。相続く抵抗運動を重ねた結果、1921年、アイルランド島の大部分は念願であった英国からの独立と自由を獲得する。その際、同じ島の北東部は連合王国つまり The United Kingdom of Great Britain and Northern Ireland として英本土との連帯の中に留まることになる。南北は分断国家を形成する事になり、多くの火種を残したまま今日に至っている。19世紀の歴史家 Thomas B. Macaulay はアイルランドを火山に譬えてその流れ出て燃え尽きた溶岩の薄い表面に下には尚も熱く燃える岩石が流れていると述べている。南はアイルランド共和国 The Republic of Ireland となつて、主として島の南・西部を中心としての26州から、そして北は北東部の6州 Antrim, Armagh, Down, Fermanagh, Londonderry, Tyrone から成り立っている。

南：北のアイルランドの国土面積の比はおおよそ5：1である。人口密度の点で北が上回っているのは産業革命以後、造船やリンネルなどを中心に工業化が進み、繁栄した時代があったことを物語っている。

N.B. 世界の豪華客船タイタニック号はベルファーストの造船所で建造されている。

アイルランド島の土地の広さは北海道よりはやや広い。北アイルランドは英本土との連合を望む人達 Unionist にはアルスター Ulster と呼ばれている。アイルランド民族派 Nationalist には島全体を一つと考えてか North of Ireland の呼び方が好まれる。厳密に言えばアルスターには Cavan, Donegal, Monaghan の州が含まれる。然し、カトリック系住民の数の多いこれら3州はアイルランド共和国のほうに属している。

次表に示された人口及び宗派別人口は1993年の調査によるものである。

BBC 公表の資料を利用した。

	面 積	人 口	宗 教				首 都 名
南	70,285 sq km	354万	カトリック	94%	プロテスタント	4%	ダ ブ リ ン
北	14,120 sq km	163万	カトリック	38.4%	プロテスタント	50.6%	ベルファスト

〔Ⅱ〕 アイルランド分割 partition に至る経緯

1921年にアイルランド26州に英国によって自治が認められ、両者間に English-Irish Treaty が交わされて以後、アイルランドは 当時のカナダ同様に英王室に忠誠を尽くす英連邦の一員としての自由国 Free State となる。更に完全独立国への道を求めて歩み続ける。

1933年には英国王室への忠誠宣誓を廃止する。1936年には“王冠を賭けた恋”として全世界にその名を知られるようになった後の Windsor 公、当時の Edward 八世が Simpson との結婚を押し通すため英国王を退位してその王冠を弟の George 六世に譲るという王家・英政府に混乱が生まれる。それに乗じた形でアイルランド総督の制度を廃止し、憲法の中の王室関連条項の改訂にとりかかる。1937年には新憲法を起草、採択し国名を Free State からゲール語の Eire アイレ／エールに変更する。1948年までこの呼称が続く。

1938年には英海軍基地のアイルランドへの返還を達成する。第二次世界大戦中に入ると英国首相 Sir Winston Churchill は将来における北アイルランドの全面返還と全島統一への英国の政治的な助力を匂わせながらアイルランドが連合国の一員として大戦に参加するよう求める。然し、アイルランドは中立国の立場を貫き通すのである。1949年にはアイルランド共和国 the Republic of Ireland となる。同時に、カナダ、オーストラリアなどの加入している英連邦から脱退する。NA TOには加盟していない。

アイルランド共和国の国旗は緑、白、オレンジの三色旗 tricolor である。フランス革命に倣ってのウルフトーンが発案とも或いはトマスミーハーが1848年に使い始めたとも色々諸説がある。緑は

古代ケルト以来のアイルランド固有の色として、オレンジはプロテスタント系の英本土からの入植者達にとって神格化されているオレンジ公を表す象徴の色として、白はその真ん中にある native と colonist との和解と平和を表す願いを込めてその図案が制定されたものである。従って、これは正に融和と統合の象徴を表している筈である。北アイルランドにおいて民族派 Nationalist 達はこの旗を全アイルランド統一のゴールのシンボルと考えている。英連合王国内にありながらも、民族派の人達はケルトの血となって流れている全島同一の民族的な帰属性を南の共和国の国旗の中に感じとろうとしている。プロテスタント系の連合王国派 Unionist 達は、当然、現在の英国旗ユニオンジャックを好んで掲げる。北アイルランド内で南の共和国の三色旗が使われる事に対して、プロテスタント系の人々はカトリック系の人達の現在所属する英連合王国への叛意を感じ取っている。

北アイルランドで Green と言えば Nationatist を、そして orange と言えば Unionist を表す代名詞として用いられている。北アイルランドには連合王国に留まることを望むプロテスタント系住民がある。そして現在の連合王国への帰属は認めながらも現状の改善を求めるカトリック系の人々がある。加えて、全島の政治的な統一を志向して南の共和国と合併した統一国家を求めるケルトの民族感情の強いカトリック住民もある。その間におけるその紛争は今日まで続いている。カトリック系住民の全島統一を望む意志表示に対して、南の共和国の側の人達の多くはそうした北のカトリック系住民の意志表示に対して控えめではあるが心情的には共感を寄せている。然し、嘗て北ベトナムがベトコンを含む南ベトナムの人々に行ったよ

うな民族統一を謳った強い働きかけ、政治ドライブは起こしていない。これに至る流れを説明するためにも大まかではあるがイギリスとアイルランドの関わりの長い歴史を駆け足で辿っておきたい。

その1. The lasting involvement of mainland Britain in Ireland

アイルランドが隣の島、イギリスと長い歴史の中における最初の関わりを持つに至った経緯は群雄間の支配権争いを島内での解決を行なわないで外国勢力に支援を求めて、それを呼び入れたことに始まる。

1170年、アイルランドの 1 king が high king の座の獲得をめぐって自分に対抗する king との間の確執を生み、その争いの決着に英国王ヘンリー二世の救援を求める。ヘンリー二世は1171年アイルランドに侵入しその地を平定して自ら overlord と称する。アイルランドの歴史を眺める時、このヘンリー二世を招き入れた事がアイルランドの政治的統一の機会を逃し、他国、他民族の干渉や支配をもたらす端緒となるのである。

その2. Ireland written in the historical plays of Shakespeare

リチャード二世は1394年に大軍を率いてアイルランドに上陸する。アイルランド軍を撃破し一旦は現地の諸侯の英国王への忠誠の誓いを得る。英国に凱旋後再び反乱が発生し、リチャード王の再度の遠征となる。本国を留守にしている間に彼の政敵であるランカスター公ヘンリー・ボーリングブルックが英国でクーデターを起こしてリチャードの王位を篡奪する。ヘンリーの王権獲得に至るその正当性をめぐっての疑問はやがて英国内で内乱を招く。シェクスピア作品「リチャード二世」から「ヘンリー四世」にはこの部分が作品の時代背景として取り上げられている。

その3. Beyond the Pale

15世紀迄にアイルランドにおいて英国の支配者達はダブリンの近くに Pale , 柵というか、砦、

城郭都市 the walled cities を作る。

それは、彼等がアイルランドの現地人の習俗や文化を未開なものと見なして、それに染まらないように努めた一つの顕れである。1367年のキルケニー法はイギリス人が現地風の名前や服装、習慣や言語を採り入れることを禁じ、更にアイルランド人との結婚などを禁じていた。これによってイギリス人のアイルランドへの蔑視感は助長されたかも知れないが、逆に、アイルランド人の言語や文化的な独立は保たれていたのである。

その4. Plantations of Henry VIII

ヘンリー八世は自らの離婚承認がローマ教皇に認められなかったのを機にローマカトリックから離脱し、新たに英国国教会を樹立しその首長となる。それまでのアイルランド卿 Lord of Ireland の立場からアイルランド傀儡議会の賛同承認を得て彼はアイルランド王 King of Ireland となる。

12世紀以来、それまでのイギリスによる征服は中途半端なものであった。その比較的に緩やかな支配であった統治政策もそれを期に厳しいものに変って行く。イギリスの同化政策は峻烈なものとなる。ペールの外の地域をも含め、宗教、言語、習俗すべての点における英国化を全国土にわたって徹底化を図る。

ヘンリー八世の娘メアリーはアイルランドの族長の反乱の制圧に乗じて彼等の土地の三分の二を没収してそこにイギリス人を住ませた。アイルランドへの本格的な植民の始まりとなる。

エリザベス一世の時代アイルランド人のアルスター蜂起に対して17,000人から成る軍隊を送り込む。残酷に鎮圧しアイルランドへの完全な征服、英国化は達成される。

土地を奪われた人達は島の西部地域の痩せ細った土地への転住を余儀なくされるか或いは又、イギリス人より土地を借りる小作にと転じて、極貧の暮らしに甘んじる事になる。ここにアイルランドにおけるプロテスタントの支配体制 Protestant Ascendancy の基礎が確立する。

その5. Cromwellian repression

1641年英本国における議会と王との対立を眺めたアイルランド民衆はその分裂に乗じてアルスター地方を中心にしてイギリス及び英国国教会に対し信仰の自由と自治を求めての武装蜂起に立ち上がる。

反乱の規模は地方蜂起から始まってアイルランド全域に拡がりを見せる。

その際アルスターの入植者が受けた被害が誇張されて伝えられる。アイルランドの反乱が王党派に加担した面もあったため、チャールズ一世が議会派によって処刑された後には、英国議会の指導者であり護民官であった Oliver Cromwell にアイルランド掃討の口実を与える結果を招くことになる。

クロムウエルのアイルランド遠征はアルスター蜂起に対する報復として無差別の殺戮となる。女性、子供、僧侶そして修道女など多くの人達が虐殺される。1652年迄には全カトリック教徒の三分の一がその対象となる。死を免れた者はシャノン河の西に追いやられる。カトリック教徒は所有地を没収される。正に“片手に聖書を、そして残る手には剣を持ちて”旧教徒に対して宗教改革の使命の燃えた新教徒十字軍はアイルランドの国土を席卷し、荒廃させる。Antrim の41%, Down の26%, そして Armagh の34%, Monaghan の38% が土地の没収対象となる。そしてカトリック住民は国内の不毛の土地や、海外への転住を強いられる。1641年にはアイルランド人の土地所有率が59%であったのが1703年には14%に迄落ちこむのである。

その6. The Penal Laws and Catholic Relief Acts & Emancipation Act

イギリスの植民地支配を完璧なものにするためにカトリック刑罰法が敷かれることになる。

それは Penal Law と呼ばれる。その骨子はカトリック教徒の土地を奪い、公民権の剥奪、つまり選挙権、被選挙権を取り上げ、公職に就くことを禁止し、彼等に教育を身につけさせないと言

うものであった。カトリック教徒はカトリックの礼拝に参列する事は出来ない。カトリック教徒の礼拝や子弟の教育の場の確保が出来なくなり underground で行われることになった。

カトリック教徒は専門的な知識や技術を要する profession 即ち、法律家、医師、軍人将校になることは出来ない。交易や通商の仕事には就けない。土地を購入する事は出来ない。財産相続に当たっては長男への一括相続ではなくその家のすべての男子に平等に分配しなければならない。また護身用であっても武器の携帯は許されない。5ポンド以上の値段の馬を持つことは出来ない。自治都市 corporate town の中心部、及びそれより5マイル以内の郊外地域には居住出来ない。などであった。

これは1695年より施行されカトリック救済令 Catholic Relief Acts の発行によってその締め付けがやや緩和されることになる1782年、そして1829年のカトリック教徒が英国国会議員になれるカトリック解放令 Catholic Emancipation Act の施行の時までこの状態は続く事になるのである。

その7. Act of Union

1801年にアイルランドはイギリスに併合される。当時の宰相 William Pitt は合併後はカトリックの解放を約束するが、これは英国王 George III に拒まれた為、彼はその職を辞任する。

1803年フランス革命の影響を受けた Robert Emmet は貧困地区の住民の為に僅か数百名の人数の者を従えてダブリンで武装蜂起したが簡単に打ち破られてその身は囚われることになる。ダブリン街頭で正に処刑されんとする時に、彼は民衆に向かって次の言葉を残すのである。「地上の諸国家の間において我が祖国がその正当な地位を持つ迄は、我が名を墓標に記すことなかれ」と感動的な言葉を残すのである。

“Let no man write my epitaph... When my country takes her place among the nations of the earth, then, and not till then let my epitaph

be written.”

その8. The Battle for Home Rule

1829年にカトリック解放法案が成立する。カトリック教徒の差別撤廃運動は O'Connell の指導によって1823年 Catholic Association が設立される。カトリック教徒の組織化と大同団結を通して大きくその主張を政治に反映するに至る。暴力的な手段を用いての反政府運動ではなくて、合法的な大衆運動を指導し、数回にわたって数十万人にも達する巨大集会 Monster Meeting を開くのに成功する。

当時、被選挙権のない彼等に残された政治的な意志表示方法として彼等はカトリックへの差別に反対するプロテスタント候補者を当選させて自らの願いの実現を図ろうとしたのである。

その後、カトリック解放法案の通過によってアイルランド人はアイルランド総督や大法官を除き profession に就く道が開かれるに至るや、O'Connell はカトリック教徒で初めてのウェストミンスター下院議員となり1841年には初のダブリン市長となる。彼はアイルランドの「解放者」としてその名を後世に留める。ダブリン市内のオコンネル通りには彼の像が建っていて今も行きかう人々を見守っている。

その9. The Great Famine

1845年から '47年にかけて夏の長雨と冷害によって馬鈴薯の病害が発生し収穫量は例年の十五分の一と言われた。馬鈴薯 spud は農民の為の主食となったのでこの被害は彼等にとって一層深刻であった。農民の間に飢餓が拡がり多数の餓死者と出すに至った。当時の人口800万人の中の100万人が餓死し、150万人がいわば難民となって片道旅券を手には故郷を離れ、アメリカを始めとする海外移住を余儀なくされた。

アメリカへの渡航者は、一旦、英本土のリバプールへ渡り、そこから「棺桶船」coffin ships と当時呼ばれたすし詰めで衛生状態の劣悪な船に乗り込んで新大陸を目指した。

船中でも多くの死者を出し又、到着後も現地の底辺労働を担っていたアフリカ系やアジア系労働者に劣らぬ過酷な労働に甘んじた。更に大西洋航路の渡航費にすら事欠いた難民はリバプールに留まった。

英本土においては American Dream と言った希望すら抱けない固定化された階層社会の中で港湾労働者や船乗りの仕事を得るのが精一杯であった。

アイルランド飢饉の時のアメリカへの移住民の子孫には、後に世界を核戦争に巻き込むか否かについて一方の陣営の決定ボタンを握っていた1960年代、キューバ ミサイル危機の際の米大統領 John F. Kennedy の名前も見られる。

飢餓当時、イギリス政府の採った飢餓対策と言えば限られた量のトウモロコシをアメリカから緊急輸入した他、病害の原因究明に科学者から成る調査団を派遣した。それらは直接的な何の救済には結びつかなかった。

この時、英政府が飢餓対策の救済費として支出した額は1,500万ポンドである。ちなみに、その後1853年に起こったクリミア戦争に費やした戦費は7,000万ポンドであった。

この飢餓に対応出来るだけ十分な量の小麦や牛肉、バター、ミルクはアイルランドにはあったにも拘わらずそれらはイギリス人の口を潤すために、プロテスタント系不在地主 London Landlords によって輸出用に向けられていた。アイルランドの小作農民はその小麦・大麦などの穀物作りでもって英本土に住む不在地主に借地代として払っていた。事実、食料を満載した八艘の船が毎日、英本土に向けてアイルランドの港を出航していたのである。

この悲劇は天災的な飢饉そのものに起因するというよりも寧ろ社会構造上の不公正の結果によるものと言えよう。小説 Ivanhoe の作者として知られる Sir Walter Scott は飢饉発生20年前に既にアイルランド農民の窮状について書き記している。

現在アイルランド全島の総人口はおよそ500万

程度である。彼等はヨーロッパ近世史における初めての“boat people”となったのである。アメリカにおけるアイルランド系住民は約4,000万人、全世界では約7,000万人と言われる。これは彼等の信仰する宗教の abortion を諫める教義に基づく人口成長率の高さと言うこともあるが“大飢饉”の時の名残りを示しているのである。ロンドンデリーの Waterloo Square は当時移民する人々がこの地で家族と別れを告げて乗船する場所であった。Sorrow Square とも言われていた。当時の人々の彫像がこの地に建っている。

その10. The winning of Home Rule and the road to partition

1879年には農村は30年の大飢饉に相当する程の不作に見舞われた。これに加えて小作農民は農作物の価格がアメリカからの安価な穀物の輸入によって値崩れを起こし一層の苦境に立った。アイルランド土地同盟 the Irish Land League はアイルランド選出の下院議員 Charles Stewart Parnell を議長として発足する。彼は土地戦争のリーダーとなって、不当に扱われていた小作農の為に戦い、又、自治法成立に力を注いだ。

ところで一方、この動きを封ずる側の人物として登場する Lord Randolph Churchill は第二次世界大戦時の英国の首相を務めた、あの有名な Sir Winston Churchill の父である事はお存じの方も多からう。1886年ベルファストにおけるプロテスタントの政治集会でプロテスタント優位の正当性を説いてアイルランド人自身による統治に反対する闘いを煽った彼の言葉、「アルスターは戦う、アルスターは正しい」「Ulster will fight and Ulster will be right」は Home rule 反対勢力の合い言葉となるのである。

アイルランドの北東部、現在の北アイルランドに当たる地域は大ブリテン島の北西部に近い。近世に入ってプロテスタント系の英本土からの入植者も多かった。それに加えて19世紀に入ってから英本土で起こった産業革命による好景気の余波も受ける。そこで農業が産業の主体となっているア

イルランド全島の統一や、それに伴う英本土からの分離となるような Home Rule を彼等が望む訳もなかった。

1892年、Ulster では英本土との連合王国の現状を支持する人達は Ulster Unionist Convention を開催する。

もし Home Rule が制定されようとするならば反対のため、その組織を挙げて戦うことを宣言する。

1910年の総選挙ではウエストミンスター議会では Irish Nationalist の協力によって与党自由党が政権を取ることが出来た経緯もあり、それまでは度々上程されながらも日の目を見なかったアイルランド自治法は1914年には通過するに至った。然し、折しも第一次世界大戦が勃発したため法案の発効はその戦争が終結するまで棚上げとなる。

1916年4月、復活祭の日曜日にアイルランド義勇軍 Irish Volunteers Army とアイルランド市民軍 Irish Citizen Army がイギリスの支配に対して武装蜂起し、ダブリン市内の中央郵便局を総司令部として占拠する。

最高指導者ピアース Patrick Pearse はアイルランド共和国 Irish Republic の建国宣言を行う。この反乱は決起直前における計画の手筈の手違いに伴う指令の混乱などがあって蜂起に際して集まった人数も僅かであった。又、当時は戦時下における好景気の影響もあり、人々の生活も比較的潤っていた事などにより武装蜂起によって世相を一変させることには一般市民の共感や支持は得られなかった。加うるに英国のこの事態への対応も素早く、5日後には鎮圧部隊をダブリンへ派遣したため、反乱は一週間でその幕を閉じた。

この武装蜂起自体への一般市民の反応は初めの段階では寧ろ冷たいものであったし、武力蜂起そのものの威力効果も putsh 程度のものに過ぎなかった。それにも拘わらず、反乱軍の降伏後、彼等に対する英国の報復措置が余りにも厳しさを極めた事が政治的な風向きを変えたのである。首謀者15名に対しては調査、詮議、裁判抜きに即刻銃殺刑と決まり、二週間後には執行されるに至った。

一般市民の民族感情 a sense of national identity を微妙に揺り動かす事になる。

処刑された者達は一転して殉教者となり、国民的な英雄となった。1918年の総選挙には復活祭当時の主役を果たしていた民族主義を掲げるシンフェイン党に同情票が集まり圧倒的な支持を得る結果となる。

ところで戦時下でその実施が凍結されていたアイルランド自治法案はその後英国議会が与党を構成するその連立の組み替えを行ったためその実施は反故となってしまった。アイルランドでは独立を促すゲリラ闘争、英国による弾圧、アルスター地方ではプロテスタントの団体であるアルスター義勇軍 Ulster Volunteer Force のアイルランド自治に反対する抗議の実力行動などが続く。アイルランドはさながら chaos と化するのである。

1920年アメリカからの調査団、英国からは労働委員会が現地に出かけ調査を行うに及んで英政府は事態の収拾に乗り出す事になる。北アイルランドのアルスター6州、そしてその他の26州にそれぞれの自治議会を開設しそこに国内問題についての権限を与えようというものであった。それぞれの議会には新しく選挙による洗礼を受けた議員が送られる。アイルランド統治法が審議され北6州が分離された状態のままで26州による自治獲得には不満を残した。1921年英国・アイルランド条約 Anglo-Irish Treaty は締結される。アイルランド議会(南)で条約は64対57の僅差をもって批准される。そしてアイルランド自由国が誕生し最終的な独立に向かって船出をすることになるのである。

〔Ⅲ〕 アイルランド史における社会変革メッセージの表明の方法

戦後、日本では一転して、西欧型の民主主義とか民主的な方法などと言う言葉が金科玉条の如く流布され、極めて安易に使われている。そしてその政治上の仕組みを最善の policy と考え、人間がその歴史的な経験、試行錯誤の中から掴み取っ

た一つの叡智の成果というか、進化の過程における望ましい一つの到達段階と optimistic に考えている人すらいる。然しながら人間は期待されるほどの理性的な存在であり、倫理的存在であるとしても、果たして、時間の経過と共にその点での進歩、発達を遂げているのであろうか？

以下においては、アイルランドが英国の支配への抵抗運動をどのように表現しようとしてきたかその方法を歴史的に追跡する。そして現在、北アイルランドにおける少数派であるカトリック系市民の場合、彼等が多数派社会に向かって政治参加の意思表示としてどのような方法を案出し行動を行っているかを眺めてゆきたい。

その1. 諸外国勢力の応援を当てにしていたアイルランドの支配者英国への抵抗運動

アイルランド史を眺める時「イギリスの危機はアイルランドの好機」と言う言葉が事実として如実に裏書きをしているのである。アイルランドが民族独立／抵抗運動を起こす時、正面からぶつかれば英国との力関係の中で簡単に押し潰されてしまっているのは明らかである。しからば英国が他国と交戦中で国内の治安に全力を尽くしきれない時を狙って武装蜂起をする。或いは他国と共謀して政治行動を起こすと言う手を使うしかあるまい。その幾つかの事例をここで見てみたい。

(1) 1590年代に Elizabeth 一世がアイルランドにおいて英国の支配権の拡大を求めてアルスター地方に進駐を始めた時、Hugh O'Neill は英国と対立するカトリック教国スペイン王に救援を求める。4,000人のスペイン軍が援軍としてヒューに送られる。現統治国の英国から見れば彼は反逆者 traitor である。イギリス政府はこれに対抗して急速17,000人の大軍を送る。アイルランド・スペインの連合軍は優勢なイギリス軍に敗れる。以後イギリス軍の支配はより堅固なものとなる。

(2) 1668年宮廷革命によって王位から追われたジェームズ二世はアイルランドのカトリック勢力と結び又フランス、太陽王ルイ十四世の

力を借りて復権を試みる。ここでも愛。仏の連合軍はボイン河の戦いで英国軍に敗れ、その後のカトリック教徒は二級市民の地位に甘んじることになる。

- (3) 1798年に統治者英国に対して反乱が、渡仏中のウルフトーンと連なった形で起こる。フランス革命直後の共和国フランス軍の応援を乞う。フランス軍はナポレオンのエジプトに遠征のため、多くの兵をアイルランド反乱軍の為に割く事が出来ず、その後の増援軍も海上で嵐や英国海軍に阻まれて結果は過去の反乱例と同じく、英国への降伏に終わった。
- (4) 第一次大戦中で英国が対外戦争に忙殺されている間隙を狙ってアイルランド独立の為に武装蜂起がおこなわれる。英国の交戦相手国のドイツから武器調達を図る。武器満載のドイツ輸送船は英国海軍に阻止される。このため武器不足のまま見切り発車となった復活祭当日の武装蜂起は失敗に終わる。
- (5) 第二次世界大戦中を通じてアイルランド共和国は中立国を通ず。北アイルランドとの南北統一の成就する好機と捕らえて英国の属する連合国側に立って枢軸国への参戦問題を切り札、駆け引きのカードとして用いて英国に揺さぶりをかける。
- (6) 1970年代に入って北アイルランド紛争においてはIRAはアメリカの在住のアイルランド移民を通して武器調達を行う。又テロの輸出国リビアからも武器調達をおこなっている。ヨーロッパの少数民族であるバスク民族のスペインへの抵抗運動団体との連携も行っている。世界の強国アメリカの支援、調停を最も期待しているものと思われる。然し、アメリカは一方で英国の同盟国であり、北アイルランド問題は英国の国内問題としての配慮がある。加うるに、アメリカ国内でもアングロサクソン系プロテスタント WASP とそして同時にアイルランド系米人を国民として抱えている現実がある。合衆国がこの問題に深入りするとこれは自国内の民族問題に発展しかね

ない火種でもある。アメリカが出来ることはIRAがアイルランド系米人の助けを借りて武器調達をして送り込むのをある程度黙認しておく事と、北アイルランドの民政を安定させるための現地の雇用に繋がる民間投資くらいが精一杯の対応であろう。

アイルランドの反乱の歴史を振り返ってみて、アイルランドが他国の軍勢を呼びいれながらも、その独立運動に成功を収めなかったのはその都度、英国地上軍のアイルランドへの派遣の機動性が優れていたこと、英国の制海権がしっかりしていたこと、アイルランドの反乱軍の軍隊としての鍛錬度、情報伝達の一本化、指揮系統の管理徹底などが未熟であり、反乱がいわば“農民一揆”の域を出ていなかった事に加え、そのたび毎の運の悪さなどが重なっている事などを挙げられる。ベトナムが圧倒的に近代的な軍事力を持つ仏、そして米の支配力を駆逐して民族統一国家を樹立出来たのは、この北アイルランド紛争の時期と重なっている。それぞれの国の置かれた政治地理上の違いもあるが、今後への比較研究の課題となり得るであろう。

その2. Boycott... 抵抗運動として案出

今や世界共通語となっているボイコットと言う語はアイルランド史を特徴づける事件に登場する人物の名にその端を発している。独語は Boykott, 仏語は boycottage, 伊語では boicottaggio, 蘭語では boycot となっている。ボイコットの意味の説明としては(人・国などに対する)同盟排斥、不買同盟などがそれぞれ辞書に収められている。

1960年代アメリカ合衆国における黒人の市民権獲得運動の際、公共バス内における白人と黒人の座席分離に抗議して、片や裁判闘争において、そして今一方で Martin Luther King 牧師の指導の下で黒人による組織的な集団乗車拒否つまりバスボイコットが連動して行われ盛り上がりを見せる。一年間続いた後、連邦裁判所の判決におい

て人種分離は違法であるとの審判を勝ち取ったことは良く知られている。

さて語源となったご本家 Boycott は1880年アイルランド北西部コノート地方 Connacht のメーヨー州 County Mayo でプロテスタントの不在地主の土地管理人を担当していた。その彼は、土地同盟の議長パーネル Charles Stewart Parnell の指導に従うメーヨー州の農民によって農作物の取り入れ作業の拒否に遭う。地代も同盟の側から見て適正と考える額を農民は Captain Boycott に手渡そうとする。彼はそれを拒否して農民追放を公示し、軍隊の力にもものを言わせようとして動員をかける。

然し、農民はボイコット大尉に対し「村八分」で応戦を図る。彼の家の出入りをやめ、召使いは家を出ていき、商人達は彼への販売を断る手段をもって対抗する。彼は世間から完全に疎外されて荒涼とした世界に独り取り残されて、誰からも相手にされなくなる。遂に彼はアイルランドを立ち去る事態に立ち至ったのであった。

その3. 公民権運動...非暴力による体制内改革運動の挫折

1921年にアイルランドは南北に分断されて北は英連合王国の中に Protestant protectorate となって留まる。北アイルランド独自の議会、首相を備えた半独立国ともいえる statelet となる。ベルファストの郊外ストーモント城内に議会将を置く。議会では unionist が万年与党となって権力を振るうプロテスタント独裁国家 a Protestant state for a Protestant people となる。カトリック系の未就業者はプロテスタントの二倍半となっていた。カトリック系の人達の場合には貧困も手伝って高等教育を受けた人数が少ない。就職出来た場合でも、専門的な技能を必要としない未熟練労働の職種がその大半であった。政府の扱う就職斡旋の窓口における求職記入用紙に所属宗派を記入させ、それを理由にプロテスタントの経営者が不採用を決定することもまかり通っていたのである。選挙権も完全な一人一票制ではなくて納税額

に基づく制限選挙によってプロテスタントが優遇されていた。個人の他に企業への別枠の投票権があって企業主などは企業への割り当て分 company vote と個人とで二回の投票も可能であった。その他、クイーンズ大学卒業生だけに与えられる大学選挙区 university vote によって知的エリートである特定の人々は優遇措置を与えられていた。選挙区の区割りについてもプロテスタントに有利なように巧妙な線引きが行われていた。ロンドンデリーの場合などカトリック地区の選挙有権者数は36,000人で議席割り当て数は12名であるのに、一方プロテスタント地区は18,000人で議席割り当て数は20という不公正さであった。今日でもウエストミンスターの英国国会の場合、上院つまり、貴族院 House of Lords では議員は選挙で選ばれるのではない。貴族出身の世襲議員の多くと、一部は裁判官や英国国教会の主教などから成る一代貴族の終身議員から構成されているのである。

そのような歴史的な遺産の色濃く残る社会環境、政治風土の中で連合王国に所属する北アイルランドは1960年代を迎える。

教育は両宗派別々に行われている。プロテスタントの子弟は公立学校に通う。そして公立学校 State Controlled School の名のもとにプロテスタントが実権を握る公立学校への参加をカトリックの方は望まない。カトリック教会が行なう教育は宗教と民族色の強い Catholic Maintained School で行われたため、政府からの私学助成金も僅かではなかった。

N.B. '98年現在、全就学対象の生徒の中の僅か3%が共学校に通っている現状である。

そして又、公営住宅の割り当てなどもプロテスタントに有利な偏った決定がなされていた。入居を希望する貧しいカトリック世帯では常に不満が燐っていた。

北アイルランドの地においては、米国のキング牧師 Martin Luther King のやり方に倣っての非暴力を前提としたカトリック系市民の公民権運動が起こる。これは当時、アメリカの黒人市民権

運動、そして、世界中で行われていたベトナム反戦運動や各地の大學紛争などの動きに鼓吹されたものであろう。人々はこの種の集会の際の愛唱歌となっていた“ We shall overcome.” を合唱し、静かな行進を行っていた。当時その背後にはIRAなどの武闘派の影は全くなかった。

最初の公民権運動の展開の方法には細心の注意が払われていた。宗派に偏らない運動としてプロテスタント派からも参加し易いようにポスターのデザインにもユニオンジャックの色である赤、青、白を用いるという工夫も見られた。スローガンも住宅と雇用の公平な分配に絞られていた。少数ではあるがプロテスタントに属する人達も加わっていた。ところで1968年10月5日の公民権運動の集会が予定され、その時のプラカードの標語は次のようなものであった。

1. 地方選挙区における一人一票制の実現、企業主などの投票特権の廃止
2. 選挙区のゲリマンダーの是正、公正な委員会による選挙区割り線引きの見直し
3. 地方公務員採用に見られるカトリックに対する差別の是正
4. 公営住宅入居者選考の公正化
5. 特別権限法 Special Power Act の撤廃
6. 公共秩序法案 Public Order Bill の撤廃
7. 特別警察Bスペシヤルの解体

警察当局は同じ日にプロテスタント団体の行進が同じ時間に行われるのでそれに伴う混乱を避けるという理由で公民権運動の行進の方は内相の指示で不許可とした。そこで主催団体である公民権協会はそれに従って中止を決める。然し、それに不服の人々によって当日のデモは強行される。それにも拘わらず2,000人の参加者があり、一行は午後ロンドンデリーの鉄道駅を出発して市の中心部に向けて平和行進を始めた。違法デモを規制するという大義名分の下に公権力が行使される。警棒の豪雨がデモ隊に降り注がれる。雇用差別が平然と行われていた当時の事でもある。警官を含む公務員の殆どはプロテスタント系の人間であった。宗派間の対立感情も激しいその地域事情も手伝っ

て、生身の心身を持つ警官、特に、治安を担当するパートタイマーの予備警察隊員Bスペシヤルは、鎮圧の際に、本来デモの整理に委ねられた職務上の権限を大きく超えた暴力を、積極的に、そして剥き出しに行使した。それは、ニュースフィルムに収まって、その映像は全世界に報道される所となった。更にその夜、デモの首謀者を検挙すると言う口実でカトリック住民の居住区bogサイドに警察隊が入ろうとした。その際に住民はバリケードを築き道路を封鎖して抵抗を示す。

この為、二日間にわたる暴動を招くのである。

1969年、新年早々に公民権運動は首都ベルファストからロンドンデリーまでの行程の平和大行進を計画する。これは1963年アメリカでキング牧師の行ったアラバマ州のセルマーから州都モンゴメリーまでのデモ行進の例をモデルにしたものである。1月1日、約40名の行進がベルファストを出発した。行進は道すがら人数を殖やしてゆき一行は500名となって目的地へと向かう。途中プロテスタント系の人々の住む村や町を通過の際には妨害も受けるが、迂回路を選びながら何とかロンドンデリーの郊外にまで達してそこで市内から迎えの人達と合流する。そしてロンドンデリーの市内に入ろうとした正にその瞬間にそこで待ち受けていたプロテスタント系の暴徒数百人による襲撃を受けるのである。これはその機会を待ち受けて周到な準備に基づいて行われていたのであった。事前に大量の投石用の石や瓶が積み込まれ、棍棒を持った男達の一団が集まっているのを警察当局は把握していた。警察隊も予想される混乱事態に備えて、その際の規制の為の要員を配置させていた。然し、彼等が暴徒を制止したり逮捕する場面はなかった。あまつさえ、逃げまどう人々の前に彼等は立ちちはだかって、金てこや棍棒を振りかざす暴徒の方に行進者を押し返す始末であった。更に驚くことには暴徒の中には私服に着替えた非番のBスペシヤルも混じっていたと言われている。

このいわばプロテスタント側の官民挙げてのカトリックへの弾圧の駆動力の原因は一体、何であったのだろうか？

1960年代になると北アイルランドにもアメリカを始めとする多国籍企業が操業を始める。それまで地場のプロテスタント系企業主と同じプロテスタント系の正規従業員とで企業ぐるみの蜜月時代を作りあげていたその秩序社会、支配体制が崩れようとしていた。他国籍企業の場合、地域的な特性である両派の序列や特別の配慮は行わない。更に又、プロテスタント側の人々は、将来、両派によって地域を構成する人口バランス比が逆転するのではないかという生活環境の不安を予感していた。それはカトリック教徒が宗教の教えに従って産児制限を行わない現状をみれば理解できる。加えて、第二次大戦後英国の採った福祉政策の恩恵に浴してカトリック系の場合も、少数の中産階級の子弟が通学圏の大学へ就学する時代にさしかかっていた。

こうして平等の市民権を訴える公民権運動の指導的な役割の一翼を彼等が担っていたという事実もその側面を物語っていた。この為、特にプロテスタントに属するブルーカラーを中心とした職種の人達には丁度、アメリカの poor white が黒人やアジア系の人達に抱く一種の競合からくる苛立ちのような感情を惹起したのではではないかと指摘されている。

ともあれこのような trouble が繰り返されてゆく中で非暴力による体制内の改革運動、つまり amelioration, devolution など提唱していたグループは平和な手段による社会変革運動の実現の効力について支持者から疑問を抱かれるに至る。非暴力による公民権運動はカトリック系の一般の人々の支持が得られにくくなり、その推進者たちの面目は失われてゆく。観念的な理想主義は現実の自分たちの最小限の生活と権利を何ら守ってくれない。非暴力の運動に対する結果への幻滅と同時に、圧制者たる公権力に対する不信感が芽生え、増幅されてゆく。

“目には目を”の対立感情や双方の憎悪が暴力を育む。手段としての暴力を肯定する経過を辿るようになる。平和的な手段による体制内の改革運動は次第に衰微してゆく。代わって準軍事組織

paramilitary force である Irish Republican Army, IRA がそれまで引っ込めていた亀の首をもたげてくる。民衆の守護神 Provisional IRA 略して通称 Provos への期待は次第に昂まってゆく。アイルランド共和国の緑、白、オレンジの三色旗が高く掲げられる。南北国境線の撤廃と全アイルランド統一の標語を添えて打ち振られながら本格的な民族解放闘争に向かってゆくのである。

その4. Parade... 政治運動の表現の場としての祭り

世界には色々な祭りがある。西欧の場合、その多くは異教徒の時代の太陽の回帰とそれに伴う季節が与える自然の恵みなどを讃える儀式としての祭りが原型となっている。

キリスト教が入ってきて後は、冬至はクリスマスに、春分は復活祭に、夏至はバプテスマのヨハネの祭日といった風にその姿を変えて今日まで根強く生き残っている。

その他、7月4日のアメリカの独立記念日 Independence Day, 7月14日のフランスの革命記念日、パリ祭 Bastille Day, 英国の11月の暦を飾る Guy Fawkes 'Day や Lord Mayor' Show などといった過去の政治的な出来事の一ページを記念して人々がその日を祝っているものもある。

それらはいずれも人々が国や都市を単位として、或いは、地域を超えた休日となってその日を祝うという共通の目的で行われる祭りである。人々が広場や通りに集い、歌や踊りや仮装の中で行列を行ったり、見物人となって生活共同体における連帯感を強め、日常生活の心の重荷や或いは単調さから解放されてそれぞれが余暇の中で生命の躍動と歓喜を共有する日となっている。

英国の季節の祭りの May Day ではなく、世界の各地で行われている5月1日の労働者の祭典の May Day には参加者が政治上のスローガンを掲げて行進し、昭和27年の東京メーデーのように皇居前広場での騒擾事件に発展したようなものもある。このように集会そのものが純粋な祭りか

ら離れて参加者の政治スローガンの掲示板となるようなタイプのものとして世界の民族の祭典オリンピックなどがある。

北アイルランドにおいては春から夏にかけて行われる恒例の行事オレンジマンによる行進は特にこの20数年にわたるプロテスタントとカトリックとの対立の起爆剤となっており、毎回暴力沙汰を呼んでいる。

北アイルランドのプロテスタント系の人々はオレンジ公ウイリアム三世が十七世紀カトリック教徒の擁護派の頭目とされたジェームズ二世の軍勢を撃破したのが契機となって今日のプロテスタント優位の生活の基礎が築かれたとしていてその日を寿ぐのである。

象徴としてその色オレンジはプロテスタントの人々にとって神聖なものであり、大切にされて今日の彼等の生活のいわば護身符となっているのである。首都ベルファストやロンドンデリーではプロテスタント系の人々が多数集まってこの300年前の新・旧キリスト教派の決戦の場であったボイン河での戦勝を記念して7月12日を中心として祝うのが1796年以来の年中行事となっている。春から夏にかけての Marching Season が訪れると北アイルランドの地において何回も繰り返して行われている。周辺の近郊からは言うまでもなく、英本土やアメリカからもプロテスタント系の人々が大勢の見物人に加わる。それは盛大な一大 pageantry となっている。

For those brave men who crossed the Boyne
have not fought or died in vain
Our Unity, Religion, Laws and Freedom to
maintain,
If the call should come we'll follow the drum,
and cross that river once more
That tomorrow's Ulsterman may wear the sash
my father once wore!
....from "THE SASH MY FATHER WORE"....

オレンジマンの行進には先導に一世紀前の英国紳士を想起させる山高帽子をかぶり黒に近い濃色

の上下揃いのスーツに白手袋、手には蝙蝠傘といたいでたちの中高年の男達の集団がリードオフマンを勤めている。最前列に位置する三人の男達の真ん中の者が、恰も応援団長のように旗手を務めて、大きな幟を両手で支えている。両サイドの二人の男達は、鞘からはずした生身のサーベル手を握り、丁度、捧げ銃の時のような姿勢でその剣を前方に直立させて歩いている。彼等の衣服の胸元の襟には、形は仏僧の袈裟に似た感じであるが、目にも鮮やかなオレンジ色の sash が付けられている。彼等のあとには喜歌劇の uniform のような服を纏った鼓笛隊が続く。編成は金管楽器、フルート、アコーディオンなどから成る。その中核をなすものはパレードの特徴である Lambeg Drum であろう。

女性も行進には参加している。白のブラウスに統一されたスカートで身を包み、オレンジ色の sash を首に懸け胸元へ垂らしている。ユニオンジャックの国旗の他に、房飾りのついた各種の幟が林立し、幟に染め抜かれた模様には、聖書物語の場面やオレンジ公の勇姿など華やかな時代絵図が示されている。それらの幟は行進する人々に支えられていたり、ユニオンジャックの色である赤、白、青の色の花で飾った山車 float に取り付けられていたりしている。

ところでロンドンデリーには中世に築かれた城壁が今尚残っている。ヨーロッパ都市の中のウィーンにも嘗てはこの種の城壁があつて、1683年トルコ軍の包囲に耐え抜いたことで知られている。ウィーンではその後、十九世紀になって都市の発展に支障があるとして城壁は取り壊されて現在その跡地は Ringstrasse として再生され、環状道路となっている。

ロンドンデリーの場合、この城壁が中世時代のままの姿で残されている。これはヨーロッパを通じても珍しいとされ、城壁が未だ破られていない事からこの町は the Maiden City とも呼ばれている。民族派の人々はこの街の呼称にロンドンという英本土の首都名が冠せられるのを植民地的だとしてそれを好まない。地名を単に Derry と呼ぶ。

連合王国派は英政府が公認する Londonderry, そして中立的な立場の人は Derry/Londonderry と併記して呼ぶ。長くなって煩わしいので/印、つまり and or を記号化した言葉である stroke を以て Stroke City と呼んでいる。この事からもこの都市の歴史のすべてが語られているといえよう。

十六世紀に英国がアルスター地方を植民化するための前衛基地として守備隊が置かれ、ロンドンから衣服組合の職人が呼び入れられ、プロテスタントの大聖堂が置かれ、そして又ジェームズ二世によって包囲を受けた際の籠城ドラマの舞台ともなったのである。1688年、職人の卵、13人の apprentice boys が城門を閉ざし、“No surrender!” を叫び、降伏を拒む。城内では敵の包囲、砲撃にも屈することなく官民が協力して援軍が来るまで籠城して耐え抜く。城壁内にいた20,000人の市民の中、4,000人が飢えや病に倒れて死亡する状態に追いやられた中で105日間も踏ん張ったのであった。やがて英軍がアイリシュ海を渡り、Lough Foyle の入り江から、Foyle 河を上って流木の封鎖線を突破して到着する。遂に彼等が救出される日を迎えたのであった。このエピソードはプロテスタントにとって永く忘れ得ぬ輝かしい歴史の中の栄光の一ページとなっていて、この聖なる場所とともに人々の心に熱く刻まれている。

歴史家 Macaulay は十九世紀に次のように述べている。“五世代が過ぎても尚プロテスタント系の人々にとって忘れ得ぬロンドンデリーの城壁とは、丁度ギリシャ人にとってのマラ톤の記念碑のようなものとなっている”と。その Great Siege の際に、包囲軍に向かって放たれた大砲の幾つかは今も同じ位置に残っている。現在城壁の中にある市街には当然の事ながらプロテスタント系の人々のみが住み、カトリック系の人々が住人として侵入するのを拒んでいる。

カトリック系の人々の住む城外のbogサイド Bogside 地区とは文字通り「沼地、湿地帯の部分」という意味である。城内より見下ろせる低地帯に位置している。プロテスタントの人々によって城

壁内よりその地に追い払われ、隔離され、閉じ込められたような地域であった。カトリックの集合地、ゲットー或いはアパルトヘイトとなっている。その地区の住民の平均所得は低く、失業者は多く、アパートの中の一軒に何所帯もが身を擠り合わせるようにして一緒に暮らしていた。

ところで、カトリックの公民権の一環としての行進は不許可として、その実行を規制してきた当局が一方ではオレンジマンのパレードを伝統行事として許可したのである。彼等の怒りは頂点に達していた。

1969年8月12日パレードは予定通りロンドンデリー市内を行進した。パレードがプロテスタントの住民の住む市の中心地となっている旧城壁の中の通りを行進するだけならまだ許せる。パレードは、カトリック地区の路地をドラムをけたたましく鳴らしながら勝者の誇示行進 triumphal expression of superiority を行うのである。カトリック系住民にはこれ見よがしの、当てつけそのものの行為であり、耐え難い苦痛である。神経を逆撫でする事も甚だしい。

果たしてbogサイド地区に行進がさしかかると、憎しみを込めて見守る住民に向かって野次が、そして小銭が投げつけられた。それに対してカトリック側の見物人の中から行列に向かって石が投げ込まれる。最前線はもみ合いとなる。Morotov cocktail が投げられるに至って騒然たる暴動 Battle of Bogside へと発展していった。紛争の火の粉は直ちに北アイルランドの首都ベルファストに飛び火した。

プロテスタントの暴徒は先制攻撃を仕掛け、カトリック住民の住むフォール街を襲う。死者や負傷者に加え、住宅400件が焼き討ちの被害に遭う。以後カトリック対プロテスタントの報復の繰り返しは一層エスカレートする。事態収拾のため南のアイルランド共和国の首相は北アイルランドに住む民族同胞の窮状と被害を救うべく国連監視軍の派遣を望む。北アイルランドは英国の直轄地である。国連の常任理事国である英政府はそれを望まず、英本土より多数より成る自国軍隊を派遣し事

態の鎮静化を企画する。駐留英軍は最初の段階ではカトリック住民をプロテスタントからの襲撃から護ってくれる平和の使者として、住民から歓迎を受ける。然しプロテスタントからの襲撃が堂々で行われている際に英軍の出動が意図的？に遅れて、結果的には暴力が行われているのを見過ごす事態となったり、又、臨時立法に従ってカトリック側の活動家を逮捕状無しの子供拘禁 internment しようとしてカトリック側の住民との悶着を起こす事にもなった。所謂、英軍はプロテスタント側に立っての tool であり、秩序の行使人でしかなかったのである。

テロ防止を名目とした子供拘禁制度、更に、隠匿武器の捜査の目的でカトリック地区を家屋毎に徹底した家宅捜査が英軍によって行われた。この人権を無視した英軍の行動に抗議して開こうとしたカトリック側市民の反対デモ anti-internment march は不許可となる。

1972年、違法デモを取って行おうとしたカトリック系市民の行進を押さえ込んで大量の逮捕者を狙った英軍には戦闘的なパラシュート部隊も加わっていた。必死で抵抗するデモ隊には催涙ガスや放水が向けられた。パラシュート部隊が発砲してその際にデモ隊側に13名を死者を出すに至った。しかも死者を確認した時に、撃たれた人達はいずれも武器を携行していない素手の人間であった事が判明した。騒擾の際の英軍の対応は過剰防衛であり暴力の行使者ということになった。1972年1月30日の出来事は“流血の日曜日” Bloody Sunday として人々の記憶に長く留まるものである。その場所、Derry のRossville には死者の慰霊碑が建立されている。

カトリック市民にとって警察は勿論、英軍も頼れる相手ではなくなった。法への信頼は地に墜ちたのである。長い間休業同然となっていたシンフェイン党の軍事部門 IRA は、そのイニシャルの読み方も本来の Irish Republican Army ではなくて、I Run Away. のほうが、相応しいなどと皮肉を受けたりしていた。その民兵組織はカトリック系市民の守護神として息を吹き返して本格

的な武器調達を始める。

カトリック地区には侵入防止のバリケードが築かれる。ナポレオン三世当時の普仏戦争直後のパリコミュンにも似た、解放区 FREE DERRY が宣言される。アルスター警察、駐留英軍などの公権力の入り込めない no-go area となってその宣言掲示板が大きく張り出される。

ところでオレンジマンパレードはその後も毎年行われ開催の場所も北アイルランド全域に及びその動員数や参加者数などそれは盛大を極めている。その都度 trouble を起こし、犠牲者を出す程の問題となっている。

近年北アイルランド紛争を終えるための和平の動きの中でオレンジマンパレードの在り方についてパレード委員会で検討が行われている。カトリック教徒の住む地区を行進する場合、パレード、行進は、住民側との事前の了解を取り付けるか、そのルートを変えるかそのいずれかであるとその決定が下された。つまり住民との話し合いがつかなければ re-route の方針が行政から打ち出されたのである。パレードの当日にはカトリック地区の入り口は封鎖される。軍や警察が待機してその監視を行う。

オレンジマンの側はこの条件に納得する筈がない。パレードの中にはカトリック地区を通過する際に旗を降ろして、騒々しい鼓笛隊の演奏を控えるという条件で警察に守られて行進を今までのコースで行った例もある。然しこれにはプロテスタント・カトリックどちらの側も満足するわけがない。ましてやプロテスタントにとって200年間も伝統的に続いているこの宗派・民族を挙げての祭典である。スケジュール・コースが公権力に妨げられてはならない。一部の人達、つまり、カトリック側の人々の恣意、我が儘に安易に引きずられてその要求に屈した行政当局の弱腰にはプロテスタントからの抗議の矢が向けられている。ベルファストや特に、その南40キロ離れた町ポートダウンの場合、オレンジマンのパレードは封鎖線ぎりぎりの地点まで行進し、抗議文を読み上げて停止する。そこで軍・警察との睨み合いの対峙 stand-off

の時を9日間も続けて氣勢をあげている。

北アイルランド全地域から集まった二千人もの支援者はテントや移動式トイレをも備えて、或いは、星空の下での座り込みを行い、彼等の強い意志表示を示している。その間、過激なグループはカトリック地区への攻撃を仕掛け、1998年7月13日、夜半、就寝中のカトリック系の民家が放火に遭い、3名のおさなごの生命が失われた。オレンジマンパレードとはただのお祭りなのか、それとも政治的な demonstration なのか、

もし re-route を行えばそれはオレンジマンの威信を傷つけ、300年続いたプロテスタント優位の社会を崩壊に向かわせる序曲となるのであろうか？

第一次大戦後、オーストリア・ハンガリー帝国が解体した後、オーストリア、ドイツ国境に地続きのズデーテンラント Sudetenland 地方では何世紀にわたって平和裡に移住し、定住していた310万人にも達するドイツ系移住民はチェコスロバキアに編入される。その結果は、一転して新生独立国家の中では少数民族となったのであった。新国家では彼等は人口全体の二割を占めるに過ぎない状態であった。折からの世界恐慌の中では就職するのも難しく、その際にも民族差別を経験したりしたズデーテンの人達は自らの自治権の拡大、民族の自決権、そしてチェコから離脱して独立を望む。その後、彼等の祖国ドイツにナチという強力政権が生まれるや、喜んでそれに秋波を送る。アルスター地方の英国系プロテスタントの人々にとってのユニオンジャックの旗が、正に、この時のズデーテンドイツ人の祖国ドイツの地で力強く翻る ハーケンクロイツ Hakenkreuz の旗であったのだ。彼等はヒトラーの東方に向かっての失地回復政策に呼応してドイツとの併合の水先案内役を務める。併合後、その地を訪れたヒトラーに熱狂的な歓呼の声援を送る。併合後、ズデーテン地方のチェコ人は公共の場ではドイツ語の使用が強制される。German Ascendancy の社会となったのである。然し、1945年、そのドイツが降伏した後はチェコ人から報復を受ける。丁度ナチがユダ

ヤ人にダビデの星のマークをつけさせて一瞥で民族の識別を可能にしたように、ドイツ系住民はチェコの地において鉤十字の印を衣服に書き込まれる。罵声が浴びせられ、袋叩にされながら、彼等は着のみ着のまま同然の姿で彼等はドイツ国境へと追い立てられたのであった。ドイツ系住民の一部はエルベ河の橋の上から河へと追い落とされる。溺れる人々には銃口が向けられた。その列に中にいた嬰兒の乗った乳母車も橋の上から突き落とされる。半狂乱となったその母親はその後を追って河へ飛び込み、死を遂げるという悲劇も発生したのであった。

N.B. 引揚途中の迫害や抑留生活の非衛生的な環境が災いして死者となった人数は25,000～250,000と伝えられている。当然ながら関係当事国民間でその数はそれぞれ違いをみせている。

旧ユーゴスロバキアが解体した後、新ユーゴのセルビア共和国に属するコソボ自治州地方では八割強の圧倒的多数はアルバニア系の住民から成り立っている。然し、セルビア共和国全体においては少数民族になっていてセルビア民族からの差別や迫害を受けている。独立国家アルバニア共和国も地続きとなって存在する。政治地図として眺めると、アイルランド共和国とアルバニア共和国との analogy が見出される。

北アイルランドで少数派となっているカトリック系市民が正にセルビア共和国のコソボに住む極貧状態に置かれたイスラム教派アルバニア系の人々といえよう。旧ユーゴの時代から彼等の住む地方は最も生活が貧しい人達から成り立っているといわれていた。アルバニア共和国からは同胞問題であつても他国であるセルビア国内政治の言及は出来ない。

コソボは中世の時代にはセルビア王国の中心地であった。その中世に、セルビア民族はコソボの戦いにおいてオスマン帝国に破れる。オスマン帝国の後ハプスブルグ帝国と続く他民族支配の時代を迎えてその多くはコソボの地を離れてドナウを越えた現在の地域に移り住んでいる。

コソボはセルビア正教会本山の地であり、そし

てセルビア帝国の首都であったのである。彼等民族の揺籃として神聖化していて、その聖地を手放そうとしない。又、アルバニア系の人々の自治や独立を認めようとする。北アイルランドにおけるIRAのように民族解放と自治州の分離独立を求めるゲリラ組織 Kosovo 解放軍 Kosovo Liberation Army, 略してKLA が誕生し、セルビア政府に抵抗している。セルビア正規軍はゲリラ勢力の徹底弾圧、掃討作戦を残酷な形で行っており国連監視軍の警告を受けている。アメリカ及びNATOは北アイルランドの場合と同様に、セルビア政府の採る民族浄化運動、差別政策の実行を止めさせ、現在の国境線を変更しない形で、コソボの自治権をセルビア政府に認めさせる案で両者を和解させようとしている。

アイルランド島の全住民でその国の構成の在り方を住民投票によって問い改めたならば、宗派の人口分布図に従って答えは明らかである。南北統一政府の誕生が必至となろう。何故ならアルスターでは多数派のプロテスタントもアイルランド島全体では少数派であるからである。その結果はアルスターのプロテスタント系の住民は、第二次大戦直後、日・独の国外植民地で永年の間、安穩に暮らしていた人達が樂園追放の憂き目を見たように、同じく侘びしい姿で英本国への引揚者となるのであろうか、或いは、少数民族となって背を丸めて今の土地で暮らす事になるのか、いずれにしても彼等の未来に明るい展望はないと思うのであろう。プロテスタント派が多数派を占める現在の政治機構と南北の国境線を維持してゆくためにも、300年の支配体制の正当性の拠り所となっている authorize され、神話化されたウィリアム公の偉業とその儀式であるパレードを無修正のまま死守することが彼等には肝心なのである。re-route は戦局否政局の変わり目となる。Uターンによる戦線の撤退はアルスター政体の悠久の大義を捨て去るもので、決して許されないのである。

Give Ireland back to the Irish

Don't make them have to take it away

Give Ireland back to the Irish

Make Ireland Irish today!

song & lyrics by Paul McCartney, 1972

その5. 女性から発せられた紛争への平和メッセージ

Betty Williams と Mairead Corrigan は1977年10月に前年度該当者の無かった1976年度のノーベル平和賞の追贈を受ける。

1976年8月、英軍兵士に追われて逃走中のIRAの車の運転者が射殺される。運転操作が不能になったため、その車は道路を歩行中の人々の中に突っ込んだのである。巻き込まれたのは母親が子供を学校に迎えに行きその帰宅途中の家族であった。それは子供二名を即死に、子供一名を重体の後死亡に、母親には重傷を負わすという事態に至らせたのであった。射撃音を聞いて直ぐその場に駆けつけたのが1家庭の主婦 Betty Williams であった。北アイルランド紛争発生以来、IRA、そしてプロテスタント系過激派、駐留英軍は、それぞれが相手への攻撃と自らが受けた被害への報復措置を繰り返している。この中でこのように罪のない無垢な子供達が犠牲になったのである。その現実を見据えた上で、これを期に両宗派を超えて暴力そのものへの反対キャンペーンに彼女は立ち上がったのである。彼女自身はプロテスタントに属していた、

被害者となった子供達の叔母に当たるカトリックに属する Mairead Corrigan と相語らい、相携えて運動を起こした。暴力は北アイルランドに最終的な社会正義をもたらすものではない。平和の実現と、理由の如何に拘わらず暴力による問題解決には反対であるとのスローガンを掲げて多くの人々の共感を集める。南の共和国の首都ダブリンで40,000人、北のベルファストで30,000人の参加者を得る。両宗派相並んでの行進デモを行い、二人はその先頭に立つ。そして又 Belfast, Derry, Dublin, London その他多くの都市で平和を希求する集会を開く。

これはごく普通の人が平和運動を起動させ、展開できる事が可能であることを世界に向かって実

証したのである。「汝の隣人を愛せよ」とはキリスト教の原点であり、「相手を赦すこと」つまり寛容の精神は西欧文明の礎をなすものである。このような個人の所属社会や宗派を超越した非利己的な勇気ある行動は暗闇となっている現在の北アイルランドにおいて一条の光を世にもたらすものであった。然しその後、平和運動 Peace Movement は下火になり、運動に関わった人達 Peace People はその人数も影響力も衰えている。

非暴力、平和を訴える事は美しい。この場合、ただ暴力行為を否定することは、一方で北アイルランドの不遇状態に置かれた人々が窮状の中から発するメッセージを封じる事にもなる。それは現状を温存し、過去から続いた秩序を据え置き、結果的には英本国に味方する行為だと評する人も一部にはある。

Betty Williams は現在は渡米し、ある大学において講義を通して平和問題について学生達に熱く語りかけている。Mairead Corrigan は北アイルランドに留まって Peace People とともに活動をしている。毎年、平和と非暴力の実現と願って40日間の断食と祈りの集いを行い、人々に参加を呼びかけている。そして又、世界26カ国を駆けめぐって平和と人権擁護の重要性を説いて廻っている。イスラエル、クロアチア、スロベニアなどの民族紛争の地域の人々を含めて全世界の人々に向けて平和と非暴力のメッセージを伝え続けている。

その6 murals... 政治的な伝言板のフォーラムとしての壁画

mural という語の意味を手許にある辞書で調べてみると

a large picture painted directly on a wall or ceiling....Random House Webster's Dictionary of American English

a large picture that has been painted on the wall of a room or building....Cambridge International dictionary of English

となっていて語源的に言えば mural はラテン語

で壁を表す murus にその端を発している事がわかる。

それはキリスト教の大聖堂や王侯の宮殿などの壁画がその時代を代表する絵画の巨匠によって描かれている場合に見かけるような文化・芸術性の高い作品の収納庫となっている場合もある。或いは loo graffiti などを含めて絵心のあるアマチュアが行う個人的な思想表現の場としての mural もある。更に又、無地のコンクリート壁とそこに描かれた抽象画を一体化させての現代美術作品、抽象オブジェが出来上がったりしていたりする場合など様々である。東西ベルリンを隔てていた壁やJ R横浜～桜木町間の高架下の壁に描かれていたような作品などと色々な場所で見かけるもことが出来る。

ともあれその mural が Belfast や Derry において軒の続いた長屋の端の家屋の壁などで随所に見られるようになったのは北アイルランド紛争が生んだ結果の、街特有の現象となっている。これは紛争によって両宗派の発したメッセージというか政治的なプロパガンダとも言えよう。

それが言葉や絵画によって表現された時、そこに見られる風刺性や言葉遊びなどといった表現性の面白さや豊かさは十分に評価出来るものである。政治闘争が行われていた同時代の日本のキャンパスなどのポスターやプラカードではそのイラストなどにおいてもユーモア感覚に乏しく、檄文の場合も、知的ナルシズムに自ら心酔しただけのようなものが見受けられた。やたらに難解な社会科学用語を羅列しただけの空虚で意味不明な立看などは私達の記憶に新しいものがある。アイルランドの今を報じている雑誌に挿入された写真やインターネットの画像によって見る限り、これらの mural には作者の個性や表現上の工夫に加え、西欧絵画や文学の2000年の文化的・歴史的な遺産が background となっている。それらを描いた無名の制作者の筆にその文化的な伝統が流れ伝わって、それが画面に滲み出ているようでもある。

作品は Nationalist, Unionist の両方側から出展? されている。我が国の美術館などでも見か

ける時代絵巻物にも現れてくるような歴史上の合戦絵図や社会描写絵図がある。特に今日の Protestant Ascendancy をもたらしたオレンジ公 King Billy がボイン河を渡る姿や、十九世紀のアイランド飢饉の際の人々の苦しむ姿、今日のbogサイドの闘いの様子、IRAのメンバーで服役中にハンストを貫徹して他界した人達の肖像などが注目を引く。加えてゲール語で書かれた古代ケルトを讃えた叙事詩的な絵画などがその題材となっている。世界中の古い都市の通りや公園などで見かける英雄的な政治家や武将などの騎馬姿の彫像を、そして教会や聖堂で見かける殉教者を中心とした守護聖人のレリーフを現代版絵画・彫像に描き改めて壁画として収まっていると考えれば理解しやすい。

それらの中で最も傑作と思われるものに当時の首相サッチャー Margaret Thatcher の人物描出が英本土の地図と重ねて描かれている壁画である。スコットランドのハイランド地方が彼女の頭として採られている。ノース海峡を挟んでアイランドと向かい合っている海岸線が彼女の目、鼻、口許とそのプロフィールそっくりの輪郭となっている。グラスゴーからエジンバラを結ぶ線のあたりの細くなっている部分が頸となっている。イングランド地方は胴体と腰である。ドーバー海峡に突き出た岬が彼女の右足、コーンウォール半島が左足となって、立ち上がった姿の怪獣にも似た彼女の化身である大ブリテン島は、その獲物であるアイランドを餌食として口にくわえている。この一枚の絵は実に多くの事を示唆しているように思える。この絵の横には大きな文字で Get the Brits out! が添えられている。1980年代のアイランドの状況やアイランドの怒りにも似た英本国に対する民族感情などが読みとれるのではあるまいか。

その7 実力行動による政治への意志表示

1968年から1998年の今日に至る迄の北アイランド紛争においては死者だけでもその数は3,300名負傷者の場合は50,000人を超えている。北アイ

ランドのカトリック系の人々の窮状には世界的な同情が寄せられてはいる。然し、問題の解決手段としてのIRAのテロとかゲリラ的な戦術は突然に不特定の一般市民を巻き込んで多くの犠牲を伴うので世界の世論の支持を得るのは難しい。これまで、襲撃の対象となった人物だけでも、英王室 Charles 皇太子の叔父に当たる Louis Mountbatten 伯を含め、政府要人、軍人兵士、警察官、刑務所の看守や司法担当者など多岐にわたっている。逆に、IRAの活動家の志気を挫く為その家族や親戚がプロテスタント系の過激派によって狙い打ちされている。そして爆破の場所や対象となる建造物もアイランド及び英本土更にドイツ、オランダ迄に及んでいる。そして又両宗派間ではその報復などが繰り返されている。テロによって自らの主張を相手方宗派の人々に、英政府に納得させ、有利な解決条件を引き出すことは不可能である。英政府としても20,000人の軍隊を常駐させて12,000人の武装警官と治安法で固めていながら、IRAを始めとして双方の過激派のテロを完全に封じ込めることは出来ない。人命を消耗するだけのいわば双方終わりがなき闘いを延々と続けている。

偏向と独裁色の強い北アイランドのプロテスタント議会政府は1972年に廃止されて、一旦は英本土中央政府の直接統治となって本国政府の北アイランド担当相が行政を統括することになる。その後、北アイランドのカトリック、プロテストの双方が妥協して権力分担する政府 Power sharing を構成する案も英政府及び両派代表の合意 Sunningdale agreement で1973年実施に移される。それに対してプロテスタント系の人々の反撥は激しく、プロテスタント系の基幹産業労働者の打ったゼネストという対抗手段に新政府は揺れ動くのであった。そして僅か一年という期間で首相は政権を投げ出し内閣は倒れたのである。そして英国の直接統治 Direct Rule に戻り、その状態が長く続いている。

永きにわたる紛争の間に通称 Her Majesty Prison の略称 the Maze の刑務所、Hブロック

には多数の逮捕者が収監されていた。彼等は自らが政治犯であり、民族解放戦争における捕虜であると自認している。一般の刑事犯罪人ではないとして囚人服ではなく私服の着用を認めるよう主張する。その要求が無視されると、お仕着せの囚人服の着用を拒む。そして備品である毛布だけを素裸の身体に纏って寒い中、昼夜を過ごし、blanket man として強い抵抗の意志を表す。又、自らの汚物、排泄物を刑務所内の居室の壁一杯に塗りつける。見た者に吐き気を催させる不潔な環境をつくりだして抗議の意志を表した。果てはハンストに訴えた。

当時の英政府の首相サッチャー Margaret Thatcher にはその要求に応ずる意志は全くなく、ハンスト実行者は見殺しとなって10名の死者を出すに至った。

ハンスト貫徹で死を遂げたボビーサンズ Bobby Sands はハンスト実施中に獄中より受刑者の主張を掲げて英下院議員の補欠選挙に立候補をする。死を賭してその主張を訴えようとした彼の情熱は人々に深い感銘を与える。圧倒的な支持を得て見事当選を果たす。然し、サッチャーは人々の期待や予想に反して

“There can be no question of political status. For someone who is serving a sentence for crime. Crime is crime, crime. It is no political. It is crime.”

と述べる。選挙得票数に現れた民意を尊重して、彼を釈放し、国会議員として受け入れるとか、ハンストの要求事項である受刑囚を戦争捕虜として認めるなどは以ての他で、ハンストを続けたいなら御勝手にと言う断固たる答えを示したのであった。サンズはそのままハンストを続け、断食を始めて66日目に遂に他界する。彼は、IRAそして民族運動の殉教者となって帰天したのである。彼の葬儀は荘重な調べを奏でるバグパイパーによって先導され、アイルランド共和国の旗の色模様であるオレンジ、白、緑の三色のカバーが被せられた彼の柩が続き、その後には切れ目のない弔問者の長い列が追従するといった、さながら、カトリッ

ク教区アイルランドの民族葬の観を呈するに至ったのである。彼の享年27歳であった。

その後1991年に鉄人サッチャーが首相を退く。同じ保守党ながらやや穏和人柄のメイジャー John Major 首相が就任してそれまで細く繋がっていたIRAと英政府の対話のパイプも少しは膨らみを増す。1997年政権が労働党に移り、ブレアー首相 Tony Blair が積極的に北アイルランド問題の解決に乗り出す。1998年4月10日、和平案は双方の合意に達した。その内容はアイルランド全土をアイルランド共和国の領土と規定している共和国の憲法を改めて現在の南北の国境線を当面は固定する。北アイルランドの帰属を共和国とするか英連合王国にするかは現在、将来共に北アイルランドの住民の多数意志によることとする。加えて、両派が選挙の得票に比例して新政権の閣僚の数を振り分けて政権を分担する北アイルランド行政政府を樹立する方向で当面の決着を図ろうとするものであった。5月22日には北アイルランドにおいて住民投票が実施された。81%の投票率の中の、71%の賛成多数で承認される所となった。新しく発足する北アイルランド議会の議員を選出する選挙も、6月25日に無事に行われ、当選議員の四分の三は和平合意を認める人達となった。北アイルランドには未来に向かっての平和の曙光が照らし出されようとしている。然しプロテスタント過激派から見れば永い間の紛争の綱引きの結果が、引き分けではなく、カトリック寄りの裁定であるとしてこの案に満足していない。IRAの方はこの案には賛成してはいるものの、尚、相手への不信感も残っている。英軍が占領を解き本国への撤収が順調に行われてゆくのに合わせて自軍の武装解除も行ってゆくとして、英国及びプロテスタントの望む即時の武装解除には応じていない。又、万一合意が守られない場合に備えて和戦両面の事態をも視野に置いて対処している。右手には剣を、そして左手にはオリーブの枝を持つというIRAの政治哲学である“アーマライト銃と投票箱”の方針は放棄していないのである。

これも一つの不安材料となっている。更にIR

Aの過激派 Real IRA はこの案が祖国統一の大目標が生かされないとして不満を示している。その後、'98年8月14日、週末の買い物で賑う北アイルランド西部オマー Omagh の繁華街で Real IRA の手によって仕掛けられた爆薬によって死者28名、負傷者200名以上の大惨事が引き起こされる。和平に向けての将来の展望は必ずしも楽観出来ない現状もある。同時に永年にわたる紛争によって疲弊した経済を立て直して失業者を減らせるかどうかも今後の鍵となっている。失業中の若者が思想を注入された hooligan となって過激派グループへの人的供給源となっている。そのためにも両派とも従来の行きがかりにとらわれずに、現在と未来に目を向けることが大切なのではあるまいか。

あ と が き

北アイルランド紛争を含めたアイルランドの英国への抵抗の歴史の跡を辿り、更に又、抵抗意志のあらわし方、その手段などを列挙してきた。地球上において国際化が叫ばれていると同時に、民族浄化が唱えられて異民族間での多くの血が流されているのが今日の世界の動きである。然し、およそ今日、単一民族からなる国家を求めること自体、不可能といえよう。現在の、そして過去に遡って先祖の国や文化・宗教などに郷愁を抱き、それに帰属意識を持つことは自然な感情である、しかも、その上で尚、現在自分が住む地域の隣の人々と溶け合い、又、現在の国や社会に対して連帯意識や loyalty, allegiance を持つことは大切と思われる。それは不可能な inconsistency なのであろうか？

Harvard 大学教授政治学専攻サミュエルハントントン氏はその著書「文明の衝突」鈴木主税訳集英社発行の中で資本主義対共産主義の対立などの経験は人類史上、僅か百年未満でしかない。宗教や文化の相違による民族対立は根深く、実に千年以上にわたっている。今日のユーゴ紛争も東方正教会、カトリック、イスラムが三つ巴になって

の争いの構図を縮図化したものである。対応を間違えるとその波及効果は大きく全ヨーロッパ、中近東そしてロシアを戦争に巻き込む危険をはらんでいると述べている。

北アイルランドでは市民の多くは宗派別の教会に属しているばかりではなく、初等、中等学校教育も宗派別、毎日購読している新聞も別、スポーツのチーム編成も別、憩いを求めて集まるパブ酒場も別である。首都ベルファストでは紛争の激しかった頃、両派の居住区の境界線を英軍によって臨時に鉄条網で仕切られたピースラインがその後、住民の手によってベルリンの壁のようなコンクリートの壁に仕上げられている。嘗ては一部に存在した両派の混住地区の住民がいたたまれなくなって自派の居住区へと転住している現実もある。世界中に見られるこのような紛争地域において、たとえば、民族間で居住地の交換を行ったとしてもそれは一時的な問題解決にしかならず、産業社会の要請は必ずや民族的な区分けの域を越えて人の移動をもたらすであろう。

ヨーロッパなどでは、どのように国境の線引きを変更しても、少数民族の問題は残る。バスク地方の民族独立運動を行っているテロ活動のグループは少数民族問題の解決を、将来のヨーロッパ統合E Uの中に期待をかけて、現在の国家であるスペインへの抵抗運動をトーンダウンしていると海外ニュースは伝えている。

全ヨーロッパにおける通貨の統合、関税障壁の撤廃、全欧州議会への参加、現在各国に住む少数民族の意思を束ねての政治要求、そして人の往来の自由などE Uへの期待は大きいものがある。言語や宗教、地域的な所得格差など乗り越えねばならぬ課題も多い。

現在のアイルランドと英国との国家的な線引き問題も、やがてそれを大きく越えて両者を一括吸収の形でE Uに統合された時、アイルランドを含むブリテン諸島はどうなるのであろう。大陸の国家が中心となつての新しいE U合衆国が出来上がった暁には、英国は、単に地理上だけでなく、美術工芸、音楽そして料理やファッションは言うまでも

なく、哲学や文化全般において、更に、経済や科学技術などの practical な面でも、独、仏を中心とした新EU社会における辺境の地の住人となって、英国自身が今のアイルランド共和国のような牧歌的な国になるのであろうか？それとも今や世界的な leading role を演じているアメリカに寄り添って、軍事力と言語（米語）の分野で補助的な役割を果たすことで米国との協調を保ちながら、何とか国際社会で米の太刀持として上座に居残り、尚、醒めやらぬ驕りの夢を見続けようとするのであろうか？

Rule Britannia を高らかに歌い、嘗てジブラルタル、マルタ、キプロス、スエズ、インド、シンガポール、香港を結ぶシーレーンの沿岸に多くの植民地を持ち海軍力と通商力で巨大な富と栄華を築いた大英帝国も今や植民地として北アイルランドを残すのみである。エリザベス一世に始まったイングランドという世界的な帝国はエリザベス二世の時代をもって終焉を告げようとしている。アイルランドは大英帝国の最初の植民地であり、そして最後の植民地となろうとしている。ロンドンと同じブリテン島内にあるウエールズやスコットランドの自治権の獲得 devolution も強まっている昨今である、嘗て、ハプスブルグ帝国として中欧に君臨し、燦然とその威光を放っていたオーストリアも今は小さな平和な山国となっている。イングランドも文字通りイングランド地方だけを指す国に戻るのを望んでいるのかもしれない。仏などと違い、第二次世界大戦後、アジア、アフリカ地域の植民地からは比較的 smooth に撤退を行った経験を持つ紳士の国とされている英国である。

一方、英本土においては、戦後の一時期、大英帝国の同じ臣民であるという建前の紳士主義と、労働者不足から旧植民地から有色の人々の英本国への移住を認めた結果、都市には新たな Slum Area が出来上がっている。ロンドンの Brixton 地区では'95年末英国の福祉政策の差別に抗議しての住民の暴動が発生している。海外に於いては旧英帝国の置きみやげがその後の世界のニュースを賑わせている。英国の統治下にあった地域、イ

ンド・パキスタン、パレスチナ、キプロスなど多くの地域が、いずれも現在、民族紛争の渦中となっている。嘗て英国は、ヨーロッパ大陸諸国が互いに相争い、諸国の力の均衡 the balance of power が保たれている状態を前提にして、その圏外に有利にその身を置いて島国英国の平和と繁栄を保つ策を講じると同時に、地中海、インド洋を中心に七つの海を制覇して、アメリカ、アジア、アフリカへと海外進出を図っていた。更に、植民地ではその現地の異民族間の対立の上に統治の安泰を貪ってきたのが過去の英国の歴史である。ヨーロッパ大陸における突出した国家の出現を嫌い20世紀前半の二度の大戦では仏、露と協力して独を包囲し、壊滅させ戦勝国となった英は、その後、凋落の坂道を一途に、転がり落ちようとしている。一方、独の方は長い苦難と忍従の後、東西の合併も果たした。嘗て、ナチドイツがその独立を認めていたクロアチアやスロバキアも当時の姿に復元した。ヨーロッパ秩序は再び独を中心に再構築されようとしている。敗戦国の独は政体を変えて、ワイツゼッカー大統領の平和外交、コール首相の経済外交の二つの顔を巧みに使い分けながら、不死鳥の如く蘇ろうとしている。金融もロンドンのシティ地区からフランクフルトへとその中心が移ろうとしている昨今である。英国は21世紀に向かつては、どのような進路を選ぼうとするのであろうか？北アイルランド問題を含め、過去の栄光の時代から受け継ぐ負の財産である帝国支配のつけを、どう英国が処理し、その幕引きを見事に行うことが出来るかゆくか、その力量が問われている。

参 考 資 料

直接の引用はない。以下の資料は、特定の箇所ではなく下敷きとして全体的に参考として利用させて頂いた。

洋 書

1. Thomas Hennessey...A HISTORY of NORTHERN IRELAND 1920-1996 MACMILLAN
2. THE ORIGINS OF THE PRESENT TROUBLES

IN NORTHERN IRELAND....CAROLINE KENNEDY-PIPE....LONGMAN.

3. The Irish Question--two Centuries of conflict...Lawrence J. McCaffrey....THE UNIVERSITY PRESS OF KENTUCKY

和 書

1. 鈴木良平; IRA---アイルランドのナショナリズム.. 彩流社
2. 松尾太郎; アイルランド民族のロマンと反逆.. 論創社
3. 堀越 智; 北アイルランド紛争の歴史.. 論創社
4. S. マコール著 小野 修編; アイルランド史入門.. 明石書店 その他多数

映 像

- *NHK放映 BBC制作 1997年
日本語の題名「IRA・抗争30年の軌跡」4回シリーズ
英語名 Provos—THE IRA AND SINN FEIN—
- *NHK, ETV特集 シリーズ ドイツ歴史教科書
加害とどう向き合うか —チェコの決断—

インターネット 閲覧 & surfing

- *ABC com World
- *BBC ONLINE NETWORK
- *BBC NEWS
- *The Irish Times...on the web
- *the IRISH NEWS Global Edition

*CNN interactive CNN. com 他多数

雑誌及び新聞 閲覧 & browsing

1. Newsweek June 29 1998 page44 Breaking into the club —Ulster are no longer for men only—
2. Newsweek August 24, 1998 PP.14~15
3. The weekly Telegraph August from 19 to August 25 1998
4. The weekly telegraph July from 15 to July 21
5. Express 28 May-3 June 1998
6. Express 20-26 August 1998
7. Foreign Affairs September October 1998.

地名・地点の検索

*The Macmillan Atlas of Irish History

人名の検索及び確認

*The Oxford Companion to Irish History

展覧会鑑賞

*大英国展—讀売新聞社

NHK

英国大使館

ブリテッシュ・カウンシル 主催

於 東京国際フォーラム

日時 1998年7月22日～8月30日